



特別寄稿

## 私の人生と図書館

人文科学科 奥山 慶洋

図書館だよりに寄稿するというお話をもらったとき、正直なところ、何を書いたらいいのか大変悩みました。と言いますのも、私自身、恥ずかしい話ですが、あまり本を読むのが好きではありません。もちろん、研究等に必要な専門図書を読むことはしますが、小説などを、一日中夢中になって読むようなことはほとんどありません。そのせいもあり、いまだに知識不足で、先輩の先生方や、友人、知人などから物事を教えてもらい、その度に、「ああ、本を読んでおけばよかったな」と反省しています。

ところで、タイトルに「私の人生と図書館」などという仰々しいタイトルを付けましたが、その理由は、本をあまり読まない私が、今まで図書館（図書室）とどのように関わってきたのかを、少し思い出してみようと思ったからです。あらためて思い出してみると、意外に関わり合いがありました。その中のエピソードを二つ書きたいと思います。

一つ目のエピソードは、私が大学受験に失敗し浪人生活を送っていた頃の話です。予備校も8月になると夏季講習が一段落し、受験勉強は、家か地元の町立図書館ですることが多くなりました。エアコンも効き、静かで快適な図書館は受験勉強にはもってこいの場所でした。ある日、いつものように図書館に行くと、高校時代のクラスメイトの女の子（彼女は現役で都内の有名私立大学に推薦入学していました）に偶然会いました。卒業以来久しぶりの再会で、最初の頃はぎこちない感じで話をしていました。彼女とは、高校時代、部活動も同じで、大学受験のときも相談に乗ったりしていたので、だんだんその頃を思い出し、話が弾んできました。結局、その日は、ほとんど勉強をせず、会話だけで終わってしまいました。その後、何回か図書館で話をしましたが、夏休みの帰省中だったため、数日後東京に戻ってしまい、特に何の進展もないまま別れてしまいました。今思うと、何か一言、気のきいた言葉でも掛けてお

けばよかったなと思いますが、青春時代のいい思い出です。（ちょっと恥ずかしい話ですが）

もう一つのエピソードは、前任校である猿島高校での話です。私は（授業を受けたことのある学生であれば分かりますが）やや怠慢なところがあり、特に各学期の期末試験が終わると、生徒たちのやる気も失せているため、それを口実に授業をやる代わりに図書室に彼らを連れて行き、自習時間にしてしまうことが多くありました。やや、言い訳がましくなりますが、そのことがかえってクラス経営を円滑にする効果を発揮することがありました。担任には話にくいことでも、司書の先生や養護教諭（いわゆる保健室の先生）には打ち明けられるということが、学生のみなさんにも多々あるのではないのでしょうか。実は、生徒が内緒といって司書の先生に話したことを後で教えてもらい、大事に至らずに済んだということがあります。詳しい内容は、生徒のプライバシーにも関わりますので書くのは控えますが、危うく退学しなければならぬような重大な事態になりかけました。しかし、司書の先生の適切なアドバイスにより、無事卒業していきました。私も、その先生には感謝していますが、生徒も、大変感謝していたようです。

図書館とは、本来、学習・教育や研究の中心を担う施設であり、知識を広めたり深めたりする場所であると思います。しかし、私のように、本来の目的とは異なる面で、図書館を有効活用している人間もいるのです。もし、私のように本を読むのが苦手な人がいたら、あまり難しく考えないで、ちょっと図書館に足を運んでみてはいかがでしょうか。ひょっとすると、素敵な出会いやおもしろい出来事があるかもしれません。そして、それが、自分の人生を変えることになるかもしれません。（本との出会いで人生が変わるというのが図書館では理想的なのですが、別の出会いもありでしょう）